

# 軍需産業の地・枚方

39期

## I テーマの設定の理由

私が小さい頃から遊んでいた、家のまわりの公園の隅に、「陸軍用地」という石碑がいくつかたっている。それは、見なれたものだったので、今まであまり気にも留めなかったのだが、近頃、なんとなく気になっていた。少し調べてみると、それらは、禁野火薬庫、陸軍造兵廠香里製造所、枚方製造所などとも関連してくることがわかった。これらのことが、私の興味をひいたのが、テーマ設定のひとつの理由である。

そして、もうひとつの理由は、「枚方」である。この私の住んでいる「枚方」という土地をより深く理解するために、1年（山之上の竹箆づくり）2年（くらわんか舟）と、研究を進めてきた。そして、その締めくくりとして今回は、「軍需産業の地、枚方」というテーマを選んで、いろいろ調べていこうと思った。

## II 研究方法

- (1) 図書館などへ行って参考文献を集め、大ざっぱに読み、理解する。
- (2) 年表を作り、整理して考える。
- (3) 年表をもとにして、細かく詳しく調べる。
- (4) 地図などを見て、位置を確認する。
- (5) 現在、実際に残っている石碑などを見に行く。

## III 研究内容

〈今回の研究に関連する事件と歴史的な大事件の年表〉

年	今回の研究に関連する事件	歴史的な大事件
明治27		日清戦争がおこる
30	禁野火薬庫で火薬を格納し始める	
37		日露戦争がおこる
42	禁野火薬庫爆発事件（1回目）起こる	
44	禁野火薬庫新築され、再び火薬を格納し始める	
大正 3		第1次世界大戦に参加する
昭和 6		満州事変がおこる
12		日中戦争が始まる
13	陸軍造兵廠枚方製造所が開設される	
14	禁野火薬庫爆発事件（2回目）起こる	
16		太平洋戦争が始まる
昭和17	陸軍造兵廠香里製造所が開設される	

上の年表から考えて、禁野火薬庫については、明治27年～44年の第1期、明治44～昭和13の第2期に分けることができるので、それぞれについて調べていく。

その後、陸軍造兵廠枚方製造所、香里製造所について調べていく。

#### 〈禁野火薬庫 — 大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫〉

##### ○第1期（明治27～44年）— 第1回禁野火薬庫爆発事件

禁野火薬庫は日清戦争中の明治27年に土地を買収し、28年3月に起工、29年10月に落成して、30年2月から火薬を格納するようになった。土地買収にあたっては、清国からの勝利品を収容するもので、全く危険はないとあって、村民を安心させ、強制的に買収したという。枚方、高槻近辺には、民間の火薬庫も散在しており、40年ごろから、その排斥運動が起こっていた。これに対して大阪府は、危険があるとはいえば陸軍の火薬庫も問題にしなければならなくなるため、これを却下していた。

明治42年8月20日午前2時過ぎ、天地も裂けんばかりの大音響とともに、火薬庫周辺の民家が倒壊した。その直前、警備兵の1人が第1倉庫で火が燃えているのを発見し、ただちに衛舎に報告した。衛兵たちは急ぎ飛び出したが、すでに遅く、第1倉庫に黒煙が立ちのぼると同時に爆発を起こし、続いて第2倉庫がさらに大きな音をたてて爆発した。当時第1倉庫には大阪砲兵工廠のダイナマイト約2500Kg、第2倉庫には黒色火薬約9000Kgが納められていた。連日の炎暑で庫内の気温が上がり、当日は湿度が高かったため、ダイナマイトが自然発火し、それが誘発したものと思われる。この爆発で煉瓦造りの第1、2倉庫はほとんど形も残さないほど吹き飛び、その震度で、その他の多数の建物も倒壊した。

火薬庫の爆発は、近隣諸村に被害をおよぼした。大阪府知事から内務省への報告によると大破家屋約25戸、小破家屋約1470戸、軽傷10人で、重傷者、死者はなかった。陸軍は、「この爆発は暑熱による自然発火によるもので、天災地変の不可抗力として法律上何らかの責任もない。」との見解を示した。したがって、陸軍は賠償の責を負うものではないが、被害民家に対して、気の毒であるから見舞金を分与する、ということになった。しかし、陸軍の意見と村民達の意見が合わなかったため、たいへんもめた。

##### ○第2期（明治44～昭和14年）— 第2回禁野火薬庫爆発事件

明治44年には、民間の火薬庫が爆発するという事件がおこり、それをきっかけにして、42年の禁野火薬庫爆発以来起こっていた、民間火薬庫撤去運動が高まり、次々と民間火薬庫が撤去された。こんな出来事にもかかわらず、禁野火薬庫は村民の希望に反して復旧、拡張されて、44年6月復旧、新築工事が落成し、弾薬庫は大小24棟になり、宇治から各種の砲弾、小銃実包などが移された。当局者は、今後は弾丸だけを格納し、ダイナマイト、黄色薬、綿火薬、黒色火薬などは一切格納しないから、付近の住民は今後安心してよいと言った。し

かし、この言葉に反して、後年大爆発を起こして莫大な惨事を与えることになった。

昭和14年3月1日午後2時40分、禁野火薬庫の15号倉庫で砲弾解体中の1工員の過失から砲弾が爆発し、それが次々と大爆発を誘発することになった。爆発は午後7時頃まで続き、大小合計30回程あった。爆発音は京阪一帯に響き渡ったと言われる。爆発と同時に出火し、倉庫はほぼ全焼し、近隣の集落に延焼して、2日午前3時頃ようやく鎮火した。爆風による倒壊なども多く、全壊・全焼 836戸、半壊・半焼 425戸であった。付近の小学校なども、ひどい被害をうけた。人的被害も大きく、死者95人、重軽傷者 351人に達した。死者の内訳は、陸軍造兵廠枚方工廠29人、禁野火薬庫39人、一般民27人であった。重軽傷者は圧倒的に一般民が多い。

爆発と同時に付近の住民は避難を開始したが、爆発のたびに鉄片、砂利などが降り注ぐため、座布団やござをかぶったりして逃れた。守口町（現在の守口市）、大阪市旭区、北区まで避難する人も多かった。大阪府警、陸軍などが、近辺の救護、治安、警備にあたった。大阪市内の各病院からも、多数の救護班が駆け付けた。大阪府・大阪市もそれぞれに救護本部を設置し、救護活動を行った。小学校、寺、大阪国技館などで避難者を収容した。パンやマッチ、毛布、など生活必需品が配給され、炊き出しなども行われた。京阪電鉄では、避難者の帰宅の為に、無賃運転が行われた。

大阪府からは罹災救助費として 53330円の支出を決定し、食料費、被服費、治療費、バラック 300戸建設費、などにあてられた。枚方町では、まず、禁野にバラック 190戸を建設することになった。それと同時に、復旧作業も進められた。陸軍からは、3月3日に陸軍大臣の見舞金として300000円が、大阪府知事に委託された。そして、1191930円が慰謝料として支払われた。その他、災害発生に伴って、各地から寄せられた見舞金は 22673円である。

日中戦争下に起こったこの事件を、陸軍はなるべく目立たないように処理しようとした。中部防衛司令部の発表は、事故発生2時間半後の5時10分になされたが、「多少の死傷者ある見込み」とだけ伝えられた。午後8時15分になっても、具体的なことには触れず、「相当の損害を予想せられるも、人心すでに安定して憂慮すべきものなく。」と発表した。翌2日午後、板垣陸相は、衆議院本会議の席上、事件の概要を報告しているが、そのさいも、「今回の惨事は、作戦遂行上に何らの支障はありません。」と強調した。同司令部は、2日午前11時半「今回の枚方陸軍倉庫の不祥事件は、実に遺憾にして、付近罹災者、殊に負傷者には申しわけなき次第なり。」として、罹災者の救護、復旧に万全の策を講ずることを約束するとともに、大阪



殉職した人の為の石碑



・京都の両府市の厚意に感謝する旨を表明している。しかし、その頃現地を視察していた中部防衛司令部外事部長末藤高級参謀は、「損害は思ったより小さいもので、陸軍自体としてはさして案ずるほどのものではない。工場内で目にした犠牲者の死体は、わずか3名で、これ以上調査しても死者はあるまい。一般の死傷についても、大阪・京都の府民たちが騒ぎ立てるほどのものではない。いろいろこの災害に関してデマが飛んでいるようだが、現場を見た者からすれば、少し大袈裟すぎる。もっと府・市民たちは、沈着・冷静な態度を持ってほしい。この現況を見てまだまだ国民の精神訓練や団体教育の必要を痛感した。」などと語っている。

#### 〈陸軍造兵廠枚方製造所・香里製造所〉

昭和6年の満州事変を契機として、わが国産業の重化学工業化、軍事工業化は急速に進み戦争の進展とともにますますその比重を高めていった。こうした戦時体制を反映して、枚方にも、陸軍造兵廠の枚方製造所と香里製造所が建設されたが、軍需工場としてはすでに、明治時代から禁野火薬庫があった。

禁野火薬庫が明治時代に設立されたのに対し、枚方製造所・香里製造所の建設は、昭和12年7月の日中戦争勃発後である。

枚方製造所は、「陸軍造兵廠大阪工廠枚方製造所」と称し、昭和12年から用地の買収および工場建設に着手し、13年1月に開設された。業務は各種砲弾および爆弾を製造し、隣の禁野火薬庫で陸軍火工廠から送付される火薬を充填、第5製造所からの送付の信管を取り付けて、使用部隊に補給することであった。製品の主なものは、各種火砲の大・中・小口径弾・爆弾(15Kg~1t)その他あらゆる砲弾、爆弾を製造した。15年4月には「大阪陸軍造兵廠枚方製造所」と改称され18年7月には大阪市東区杉山町(現大阪城公園)にあった大阪陸軍造兵廠の第2製造所が、工場自体は従来そのまま枚方製造所の管轄下に入れられた。その後、戦争が激しくなるのに伴い、火薬・信管類を製造する第5製造所を大阪市内に置くのは危険であることや、空襲のおそれもあり、かつ弾丸製造と同一構内に置くことにすれば、一貫作業の有利性もあったため、17年後期から、14年に爆発した禁野火薬庫跡に移転が計画され、18年から工場建設にとりかかり、19年初めに建物の一部と信管製造設備全部の移転を開始し、3月に完了し、信管部品の製造、填薬、組立てが行われ、翌20年4月に枚方製造所の管轄下に統合された。



桜公園という所の中に残っている石碑。「陸軍用地」「25」と彫ってある。香里製造所があった場所だと思われる。

香里製造所は「東京第2陸軍造兵廠香里製造所」と称され、火薬製造を行っていた。昭和14年1月から工事に着手し、17年3月に落成した。ここで火薬の製造が開始されたのは、東京や宇治製造所などが、増大する火薬の需要に応じきれなかったためである。

また、枚方製造所へは津田駅から、香里製造所へは星田駅から、それぞれ片町線の引込線が敷かれ、砲弾・爆弾や火薬の輸送に利用された。

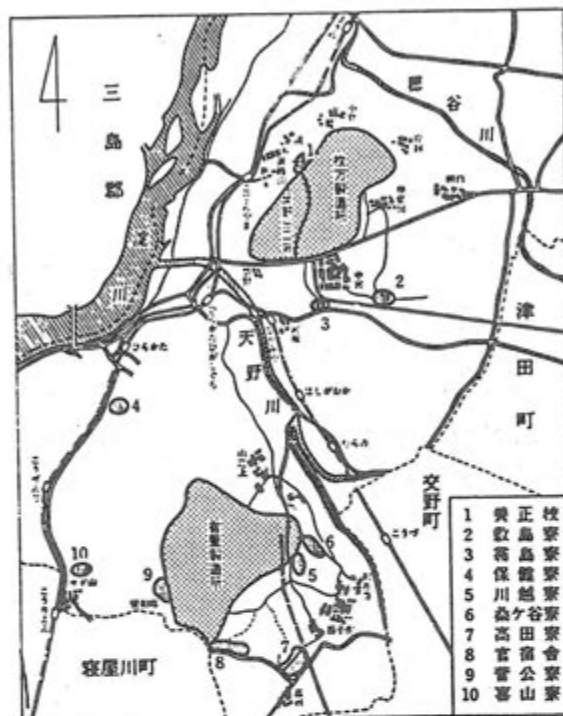
戦火の拡大とともに、製造は昼夜兼行で行われたが、多数の工員を必要としたため、工員の確保に苦勞したようである。敗戦当時の大阪陸軍造兵廠工員は約75000人であった。枚方製造所だけでは約11000人で、その最盛期は昭和19年から20年までであったという。このような多数の工員は、主として枚方周辺や京阪沿線から雇用されたが、必要人員を確保する為遠く四国・北陸まで募集が行われている。

集められた工員は各製造所周辺の寮などに收容された。この他、徴用工員、学徒動員によって人員補充が行われた。

枚方に開設された軍需工場は、枚方内外の住民に雇用の機会を提供するものであったが、一方、砲弾・爆弾製造所や火薬庫という危険物と背を接しているようなものであるから、住民の不安は大きかった。

#### Ⅳ 結 論

- 禁野火薬庫の爆発事件については、予想外の被害の大きさであった。けれど、もっと驚いたのは、この事件に対する、陸軍、すなわち政府の対応の仕方であった。爆発までの経過や、その後の様子などを詳しくたどっていくと、終戦までの政府の力が、どれだけ強かったかということがわかる。
- 陸軍造兵廠枚方製造所・香里製造所については、枚方製造所の為につくられた寮に、父が大学時代住んでいたことから、少し詳しく話を聞くことができた。そして、動機であげた「陸軍用地」という石碑については、香里製造所のものであるということがわかった。このような石碑が現在まで残っているということは、とても重要であると思う。



枚方市域の軍設備配置図

○研究していくうちにできた、「何故、枚方が軍需産業の地として選ばれたのか。」という疑問については、次の二つのことが少しずつわかってきた。まず一つは、明治中期からすでに禁野火薬庫が設けられていたこと。そしてもう一つは、当時砲弾製造・格納の方式が変更され、広い敷地が必要になる一方、原材料や製品の砲弾・爆弾の輸送に適した交通の便利な地域が求められ、その当時枚方は開発が遅れ人家散在で、近くを片町線が走っていたこと、である。

## V 総括

今回の研究は、ほとんどが本などの資料によって調べただけで、1、2年の時のものに比べると、自分の足で歩いて知ったことが少ないという点で、とても残念に思っている。けれど、ずっと本の中などで調べていたので、実際に石碑や、工場があった場所に行ったとき、何か、口では言えないような気持ちが湧いてきた。

知りたい、と思ったことは充分知ることができたし、それ以外にもたくさんを知ることができた。3年間のまとめとしては、少しもの足りないような気もするけれど、それなりに良かったのではないかと思う。

## VI 参考文献

- |               |            |
|---------------|------------|
| 「枚方市史」第四巻、第五巻 | 枚方市史編さん委員会 |
| 「郷土枚方の歴史」     | 〃          |
| 「朝日新聞記事集成」第九巻 | 〃          |
| 「語り継ぐ戦争体験」    | 企画調査室      |